

豊かなスポーツライフをサポートする情報誌 Sports Japan

2014年09-10

Vol.15

日本のスポーツの普及・振興を100年にわたり支え続けてきた公益財団法人 日本体育協会の新情報誌。指導者はもとよりスポーツにかかわる全ての人に、日本体育協会だからこそ成し得る充実した内容と最新のスポーツ、健康に関する情報をお届けします。



有料購読申し込み

スポーツ関係者の皆様からのご要望にお応えして、有料販売をしています。本体価格は1冊500円(送料込・税別)。平成26年11・12月号および平成27年3・4月号は特別号とセットで本体価格1000円(送料込・税別)です。なお、平成26年5・6月号から平成27年3・4月号までの年間定期購読料は3,000円(通常号6冊および特別号2冊/送料込・税別)となり、各号ごとにお買い上げいただくよりも25%お得です。

有料購読をご希望の方は、日本体育協会のホームページからオンラインでお申し込みいただけます。また郵送およびファックスでのお申し込みをご希望の方は、日本体育協会ホームページにある購読申込書をプリントアウトのうえ、必要事項を記入して下記まで先までお送りください。Eメールでのお申し込みも受け付けています。

<http://www.japan-sports.or.jp/>

トップページ → 広報・出版・ビデオ → Sports Japan → 定期購読・単発購入・バックナンバー申し込みについて

公益財団法人 日本体育協会 総務部 広報課
〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館
TEL:03-3481-2273 FAX:03-3481-2284
Eメール:sports-j@japan-sports.or.jp

バックナンバーのご案内



CONTENTS

巻頭コラム 広げようスポーツの輝き

「必死で戦い抜いた末に敗れる姿は 見る人間の心を動かす」
徳光和夫 (フリーアナウンサー・タレント)

特集

スポーツで日常生活を充実させよう

Part1 考察「ヒトとスポーツの関係」

浅見俊雄(東京大学・日本体育大学 名誉教授)

Part2 医・科学的見地から

小西郁生(京都大学大学院教授/医学博士)

Part3 子どもの日常生活とスポーツ

西多昌規
(自治医科大学講師/日本体育協会公認スポーツドクター)

Part4 「私の文武両道」インタビュー

鳥原光憲さん(東京ガス取締役相談役)
吉村隆之さん
(京都大学工学部4回生/アメリカンフットボール部主将)

特別企画

国民体育大会改革のいま —オリンピック競技種目の新規導入について



- ▶作家 森沢明夫が行く スポーツの風景 ①
ベタンク講習会を訪ねて
- ▶「スポーツ指導を考へる」 ②
宮本恒靖さん(元サッカー選手/サッカー解説者)
ジャック・ボトビエッターさん(ラグビー選手/宗像サニックスブルース)
- ▶「わたしのフェアプレー」インタビュー ③ 越川 優(バレーボール)
- ▶恩師のこぼれ ④ 乾 友紀子(シンクロナイズドスイミング選手)
- ▶総合型地域スポーツクラブ訪問
- ▶スポーツ少年団訪問
- ▶ACPクリニック「遊びの伝道師」が行く! ⑤
- ▶目指そう! 育てよう! 真のリーダー 指導者のためのリーダーシップ論 ⑥
- ▶スポーツ現場のプロフェッショナル
- ▶ATが教える現場サポート「基本のき」 ⑦
- ▶スポーツマンが学ぶ「前向き思考」のススメ ⑧
- ▶指導者・保護者のためのスポーツ食育ガイド ⑨
- ▶スポーツ法律ワンポイントアドバイス ⑩
- ▶日々愛好日 ⑪
- ▶最新スポーツ科学情報 ⑫
- ▶JASAインフォメーション
- ▶読者の広場/ブックレビュー/プレゼント

連載

特集

夏の悔しさを次につなげる

新チーム「始動」論

The Coaching Style

わがチームの練習風景



中村猛安

< 日大東北高監督 >

Profile

なかむら・たけやす/1979年6月6日生まれ。大阪府出身。PL学園高一日本大。選手時代は主に二塁手としてプレー。高校3年夏の府大会で8強。日大進学後、4年時には栃木・小山高でコーチを務める。卒業後、2002年から日大東北高のコーチ。09年に部長を経て10年から監督としてチームの指揮を執っている。12年夏、13年夏の福島県大会では2年連続の準優勝。地歴公民科教師。



2年連続サヨナラ負けからのチームづくり

勝ち切るための我慢強さとは

福島県の高校野球をリードする聖光学院の前に、2年連続で県準優勝に終わった日大東北。特に今夏はあまりにも劇的かつ、悔し過ぎる逆転負けだった。そんな旧チームの想いをどのように受け継ぎ、新チームは始動したのだろうか——。日大東北を率いる35歳の若き指揮官にお話をうかがった。

昨年、そして今年の夏と、ウチは福島県の決勝戦で聖光学院さんに涙を飲むという結果になってしまいました。しかも2年連続のサヨナラ負けでの準優勝ですから、あと一歩で勝てるというところまで行きながらの悔しい敗戦でした。

ある意味、高校野球というのは非常に残酷な一面がありますよね。勝

ったチームが大喜びしている一方で、負けたほうは泣き崩れている……。しかしそれが高校野球でもありますから、私は旧チームの3年生たちに「野球だけに限らずこれからの人生で、聖光や他のチームの選手たちに負けないように頑張っていってほしい」ということを最後に伝えさせてもらいました。

そもそも昨年の夏は、よく決勝戦まで行けたなと思えるくらい選手たちが本当によく頑張ってくれたというのが私の正直な気持ち。ですが、明らかに今年の夏は状況が違いました。秋に聖光学院さんの連勝記録(県内95連勝)を止めての優勝。春は負けましたが、今夏こそは大和田啓亮というエースを擁して第1シー